



神話も、やがてしだいに社  
会情勢の複雑化に伴い変容  
します。そのうちこれらを  
統一、支配する有力豪族が  
ところどころに出ますと、  
その豪族が、そういった土  
地の神話をとり入れて自家  
の祖先神話に仕立てる。つ  
まり、その神と自家の家系  
が血縁関係にあることをい  
い立てて、己れの家を尊貴  
性を誇示する神話に仕立て  
るのです。そして、その理  
由づけとして、昔神さまが  
自分の一族の娘に妻問いを  
したというふうには、たとえ  
ば丹塗り矢の伝説とか、オ  
ダマキ式神婚譚とか、その  
他いろいろの感精説話を生  
みだすわけです。生みだす

というよりも豪族自身が自  
と意識的に唱えだしたのか  
もしれない。その神話は、  
その氏族の祭祀権と、それ  
による土地の支配権の、い  
わば保証書なのです。  
したがって、民間信仰か  
ら出てきたような神話、そ  
れからほかの民族などにも  
たくさん分布しているよう  
な話——先ほどいわれたよ  
うな因幡の白兔の話などは  
インドネシアにもそういつ  
た事例がありますが——そ  
れらが、あくまで豪族を媒  
体として何らかの形で宮廷  
に入ってくる。それが記紀  
神話の非常に重要な特色で  
はないかと思うのです。

記紀神話の特徴は

王権の起源を語ることに

よく宮廷神話と民間神話  
中央神話と地方神話という  
ような分け方をされますが  
地方の神話、あるいは民間  
の神話それ自身が、各地の  
首長層、つまり豪族層のも  
とで第一次的な編成がなさ  
れている。各地域ごとに、  
それ自体の中での一定の政  
治勢力を背景として、民間  
に伝承されている神話が編  
成される。

神話と語部との関係につ  
いて申しますと、語部を、  
ホメロスの吟遊詩人みたい  
なものと対比される方が多  
いのですけれども、それは  
歴史離れしているというの  
が私の考えです。語部とい  
うのはたんなる口誦集団で  
はないのです。それは農民  
であり、あるいは漁民であ  
って、そして部でもある。  
部という政治権力によって

把握された集団ですね。た  
とえば出雲の首長のもとに  
隷属した語部の姿というの  
は、八世紀の文献でかなり  
復元できるわけです。そう  
いう作業を続けてやってみ  
ますと、それ自体が隷属者  
集団ですね。  
だから『出雲国風土記』  
における神話伝承というも  
の、出雲の首長の権威を  
強化するものとして筆録さ  
れているのです。国引きの  
伝承とは、つまり出雲の国  
というのはどうしてできた  
のかということでもとめら  
れているわけでしょう。出  
雲国造の拠点は意宇（オウ  
）郡ですから、だから国引  
きの完了の場所はやはり意  
宇の杜となるわけです。民  
間の伝承自体が各豪族層の  
もとで結集され、その場で  
第一次的なまとめがなされ  
ているわけです。

従来、日本神話の虚構性  
というふうなものを指摘す  
るときに、宮廷の役割が重  
要視されてきたのですが、  
それは間違いいではないけれ  
ども、その前提には各豪族  
層における、まず第一次の  
編成があるのです。そうい  
う地方豪族における編成と  
宮廷における編成という、

そこにもいくつかの段階が  
ある。記紀神話が、政治的  
に編成されているといわれ  
るのですが、それはたしか  
にそうなのです。しかしそ  
れならギリシャなどの神話  
には王権の起源を語った神  
話がないかといったら、そ  
れはあるわけです。この政  
治性というのは、決して日  
本神話だけの特徴ではない  
のです。日本神話が王権の  
いて集約されていますが、

起源を語っているから非常  
ほかに宇宙とか人間の起  
源を語った神話があること  
も見がせない。だが『古  
事記』『日本書紀』では、  
王権の起源を語ることを中  
心にしてきわめて体系的に  
歴史的にまとめられている  
そこが記紀神話の大きな特  
徴である。（座談会・神  
話の時代、その虚構と真実  
より）

貞享三年寅四月

相州足柄下郡曾我谷津村

田畑差出帳

神田太郎吉編

東筋曾我谷津村 一、高四百二十一石八斗一合 田畑辻	上畑 一畝八歩 分米 八升九合	一畝十五歩 中畑成 分米 百參拾參石式斗五
此反別 四十三町九反五 畝二十九歩	下々畑 三十六歩 分米 三升六合	升四合 石盛十三 下田 四町參畝拾壹歩
内九石七斗八升壹合永引 此反別七反八畝八歩	残四百拾貳石一升四合 此 反別 四十三町一反三畝二	内 一畝十歩 中畑成 四畝歩 下畑成
内上田 一反七畝二十歩 分米 一石七斗五升	六反六畝二十七田 七町 内 反五畝三歩	分米 四十四石三斗七升 石盛十一
中田 三反六畝拾歩 分米 四石七斗貳升參合	畝八歩 中畑成	下々田 三反二畝二十一 歩
下田 二反三畝二歩 分米 二石九斗七升七合	分米 百拾五石三升五合	分米 貳石九斗四升三合
下々田 一畝二歩 分米 九升六合	石盛十五 中田 拾町二反五畝壹歩	上畑 七町一反七畝二十 歩
	内 一反六畝二十三歩	上畑成 内 壹畝十歩 屋鋪成

分米 五十石二斗三升

石盛七

中畑 三町六反三畝二十

九歩

内 二畝歩 屋舖成

分米 拾八石一斗九升五

合 石盛五

下畑 四町九反一畝二十

四歩

分米 十九石六斗七升二

合 石盛四

下々畑 三町三反一畝十

二歩

内 一畝九歩 下田成

分米 九石八斗四升二合

石盛三

屋敷 老町八反四畝貳十

七歩

内 一反歩 名主被下

分米 拾八石四斗九升

石盛十

田敷合式十式町貳反八畝

歩 内三反三畝二十九歩

上中下より畑成

一、漆一貫百六十九文 毎

年上納仕候

一、当村松御林老ヶ所 曾

我谷津村 曾我原村出

合御林 稲葉大学様御知

行所田中村境

此運上金壹分錢六百四十

八文山御奉行家へ上納仕

候御林守壹人足へ枯枝被

下候

一、永山錢壹貫百三十文

一、永三百七十匁当村御林

御年貢

二口ノ壹貫五百五十匁御

割付之面にて年々上納仕

候

一、蜜柑木数年々御改被遊

蜜柑なり申候へば御見

分上年々上納仕候

一、家並薪二百七十九束

長二尺・廻り三尺 毎

年上納仕候

一、萱五尺廻り六束付御納

度上納仕候 直段

儀の拾駄に付壹分宛被

下候

一、新御藏下敷ねて延禊等

々やらい法人足御触次

第出仕候 曾我原組

一、御城蔵城米百五十九俵

日限御触之節御城米御

蔵に納御候

一、助馬式貳七歩 御触之

度出申候

一、錢三百五十文 助馬指

給分毎年出申候

一、錢三百四十文 助馬指

配符使給分出申候

一、御鷹番 御用次第出申

候

一、田畑御年貢御相成高ニ

テ五厘引名主被下候

一、御醬油白大表五六升宛

御用節納申候 此代米

麦一升五合米一升宛被

下候

一、寒ざらし白もろこし一

升五合に米一升宛被下

候

一、糠式拾俵 但し七斗入

毎年上納仕候

一、糞十五駄 但し五尺廻

り毎年上納仕候

一、大和柿毎年木數御改被

遊柿なり申被下得々御

見分上柿にて上納仕候

一、御上洛朝鮮人琉球人御

通りの時人馬登りは三

嶋まで下りは藤沢まで

一、在に御用御奉行衆御通

り節御菜薪油等々内

宿の節御御奉行衆御通

歩人足出申候

一、当村御林にて御用木御

伐被遊候時山奉行衆陪

之薪へ御林にて取り申

候て焼申候野菜之儀は

此方より出申候 枝木

へ当村に御私被遊候直

段大束一束に付代七文

以下

一、正月用御飾道具御門松

御用次第に山御奉行御

手形通り納申候右御飾

道具江戸廻し運賃等々

御札錢高割にて出申候

一、五月御節句御入用之し

ようぶ年々御触之度出

申候

一、繩〇足代繩御触之度出

申候

一、綱薬 右同断

一、江戸廻し俵持人足 右

同断

一、米払馬 右同断

一、米積替人足 右同断

一、薪払馬但一疋に付大豆

五合 右同断

但し口付一人に付米五

合宛被下候

一、金手 東大友村にて揚

候て田八反余りノ廻へ

参り申候

一、酒匂飯橋木伐り人足但

一人二付米五合宛被下

候

一、網糸御用立の節綱麻

受取系持御舟奉行衆へ

納申候

一、竹持人足所に御林より

川除場迄に持送り申候

一、薪払之節御林又兵小屋

等御扶持方渡相動申候

御扶持米不被下候

一、種木拾参ヶ所 (略)

右申上候節御見分被遊当

村御林にて被下候

一、種木老ヶ所九ヶ村寄合

之場所 東大友

一、川除場四ヶ所 老ヶ所

剣沢通り老ヶ所舞戸老

ヶ所中地河原老ヶ所辻

前通りかご綴等かき場

土儀ともに日用被仰付

候

右川除入用杭木薪共当村

御林には被下候 人足山

家筋より参候

一、名主家造仕候節材木奉

願儀得、当林御林にて

被下候

一、馬草刈申山当村御林又

へ古怒田村境山より刈

申候是又入廻ニ御座候

一、薪取山当村御林より落

葉かき申候又へ畑宿山

塔沢山より取申候此道

法五里

一、葦置から甲山畑宿山ニ

テ刈申候是道法五里

一、百姓四壁内林前ニテよ

り被下置候

一、春夫食米之儀毎年以書

奉願候得御貸遊被候之

利米は老割五歩にて十

一月御上納仕候

一、曾我太郎祐信屋舖跡六

十間四方程

一、是は当村名主八左二門

屋敷内に御座候尤かま

いは右屋敷前通り曾我

別所村曾我原村曾我谷

津村三ヶ村畑と相成申

候事

一、右祐信殿石塔是は誰人立

被申候は申伝へ無御座

候

一、古井是へ五郎時宗矢の

根みがき被申候之申伝

候

一、杓石是は五郎時宗足跡

の由申伝但足跡老尺式

寸巾六寸

一、劍の山之内長式拾間横

十八間劍の高五尺より

一文まで

一、当村より小田原御札辻

迄で道程式里

一、当村境東曾我別所村西

曾我岸村南曾我原村

一、当村人数合三百九十八

人 男九十八人

(中略)

宮神社 老社 正八幡

御神体御幣

老社 小沢大明神

御神体木仏

恒武天皇

御神体木仏

禰宜播磨

因二反八畝二十四歩 御

免地一社

一、ほこら三社

一社 山神宮

一社 山伏大光院横

一社 稲荷

一社 禰宜 播磨横

一社 五郎宮

右之通り田畑反別等諸色

書付少しも無偽前に上之

通書上げ候

若賜より相違の段申出で

候へば何様之曲事にも可

被仰付候其為 名主組頭百

姓代加判仕差上申候仍如件

貞享三丙寅年四月

東筋曾我谷津村

名主 八左衛門

組頭 平右エ門

八兵衛

佐治右エ門

金兵エ

伊兵エ

総百姓代

原稿の都合上「神話の時

代」その座談会を集録。

貞享三年といえは久保

氏が故地小田原城に返り咲

いた年である。そのとき、

領内の事情に通ずるため各

村に村明細帳の差出しをも

とめたという。それと関係

があるかどうか。(H)

# 北原白秋のこと

(末次富士子夫人聴書帳より)

中里 史子

午后になると、隣家の北原家からひとしきり賑やかな騒ぎが起る。

「ガアガアガア  
ガアガアガア」

「又ハタシヨン(白秋の仇名)が騒ぎ始めた。全くなおかしな人だね」

その頃お花畑には三四尺巾の小さい流れがどの家の庭先に共通に流れて、海に注いで居た。やり水である。その小さい流れに白秋は二三羽のあひるを飼って居た。執筆に疲れた気晴らしに、午後になると家鴨を追ひかけて遊ぶのであった。帯を胸の辺迄たくし上げて着物の裾をはしょって挟み込み、下穿きのみえる位まくり上げて、水の中で家鴨を追いかけて子供のように騒ぎだてる。

「ガアガアガア  
ガアガアガア  
マナスル マナスル  
ナンカ タベタイナア」

唄のように繰り返してしまふ。唄をつけて大声でわめく。大きな赤ん坊のように、天衣無縫の生活振りであった。後の方の「マナスル、マナスル、ナンカ、タベタイナア」というのは近所に精薄の青年が居て、この言葉をいつも口にして居たのを真似して居るのであった。その青年はかつて真鶴に連れ行ってもらったことがあり、その時余程嬉しく忘れて居た。それ程嬉しく忘れて居た。それ程嬉しく忘れて居た。

## 白秋夫人

私の母中井ヒナは、なかなか魅力的な人であった。糖尿の為の摂食が度を過ぎて、結核になり、気候のいゝ小田原に養生に来て居たが、遠近から来客が絶えなかつた。機智に溢れ、ユーモアたっぷり、人の面倒見も行き届いた人だった。

「マナスル マナスル  
ナンカ タベタイナア」  
それを白秋は自分の唄にしてしまつて、ガア、ガアのと続けて云うのだった。そういう白秋を朝夕見ていると、つい「ハタシヨン」なんて呼び方であつて

家のようだと気分がいい時は、そのおしゃべりを気晴らしに聞くこともあつたが、時々持てあまして居たようだった。

うちのばあやが、童子さんのひいきで、よく煮物など届けたり、持たせてあげたりして居たようだった。何かの折に着物の話になつて「お腰巻」の話になつて

「緋ちりめんの腰巻がほしい」という話から、母が「ではあげましょう」ということになつて、早川口の片野屋呉服店から、その分切らせて、あげたことがあつた。怒しがる方も、あげる方も、両方も随分愛つていると思つた。

それから間もなく、童子夫人は白秋と訣れるようになり、かなりみじめな遍歴の生活がつづいたようである。

## 宗我神社の由来記

神 保 栄

宗我都比古、宗我都比売の二神を祭神として長元元年十一月延喜式内官幣大社宗我社の神官宗我播摩守保慶が社職を子の保頼に譲り、此地に下り宗我社を勧

堀川天皇の祈願所となり永隆元年曾我太郎祐信が鎌倉若宮八幡を奉祀再營したと云ふ。主神の両側に応神天皇と桓武天皇を祀る。桓武天皇は大森信濃守が応永二年小田原築城に際し、城の鬼門鎮護の神として奉祀し小沢大明神を合祀すると云ふ。祭礼は九月二十九日にして、大太鼓猿田彦尊神輿大舞獅子立傘狹箱四神舞弓鉄砲長刀の歯薄を従へ八幡の浜まで行き浜おりされたと云ふ。

其後屋台が出来、其中で長唄を唄ふたが、当地大久保家より檢視が見えて式が厳重であつたと云ふ。明治二年三月神祇官に於て社号を宗我神社と定め六

各副会長の担当は次のとおりです。よろしく。  
難波 明 史蹟めぐり  
穂坂行雄 会報の発行  
鈴木平八 事務一般  
(会長井上英一)

## 在りし日の妻によせて

広 沢 十五夜

在りし日の妻が好みの赤サンパス  
もの言ふ如く咲きいるなり  
夢うつつに在るひととの朝明けの  
青葉の窓はうすく紅はく  
ほろにがき思いに一途に耐えきたる  
人生の機微われをさいなむ  
老(おい)といえ自覚を強め生きぬかん  
モノリザの絵に心引かれて  
たそがれなほ紫色のかけ残す  
花菖蒲見つゝ淋しさまさる